# 園藝と人生

田垣住雄

園芸ほど人生にうるおいを与えてくれるものはない。芸術はすべて楽しいものであるが、花卉、蔬菜、果樹、庭樹、盆栽など、生き物から生まれでるさまざまな感激の継続は、園芸でなければ味わえない。

スピードアップ、コンクリート、電気、電波など物質文明が進むにつれて、騒音のはげしいうるおいの少ない生活環境にとりまかれるようになるほど、土が恋しく、土から芽生える自然がなつかしくなってくる。

科学万能主義では一切の現象を物質と運動とに分けて、その真理を科学によらなければ会得できないと考えてから、物質方面の無生物では驚くほどの進歩発達を遂げ、物理、化学の進むにつれて割り切れる要因を見出し、電子頭脳まで使って正しい答を出し、急速度で進んだのであるが、生物の方面では、いかに理化学を応用しても、物質的のことだけはわかるが、生命の本質になると割り切れるような要因が見出し難く、たとえ蛋白質が合成できたとしても、これに生命を与え繁殖発育、分裂増殖というような生機を創造することができない。

科学万能の文明といっても、無生物科学の方面が急ピッチで進んだのが、近代の文化経済相であるから、近代文明では物力が生力を超越して、スピードアップや超自然爆発力が生物の生存をおびやかすようになった。このような物質科学文明であるから、生物にとっては危険な有害な環境がふえてくるだけで、これが果して生物社会の文明開化であるかどうかを疑わざるを得ない様相である。

物質を分解するほど原始物になって、原子から電子（素粒子）、電子から光子と単純化し、その運動方則も一定してくるから、割り切れる要因で正しい答がでるようになるので、極相まで進むのであるが、このようなことは宇宙の原始時代相の再現であるから、無生物時代の様相に遡る科学的方向である。だからこんな方向を持つ文明が進むほど生物の棲み難い環境が増すわけである。

これに反して生物科学では、生命を中心にする生活体の生存発達を目標にして、宇宙の大自然に順応する生の継続進歩を目的にするので、生の成立が基本になっている。生は原子時代から分子時代に移って、現在原素といわれる物質に安定してから発生増殖進化したものであって、今後も環境の変化に順じて適応進化する生命力を持っている。生命というものはまだよくわからないが、繁殖、発育、適応という物質に乏しい機転を結集するところに特色がある。

人間の本質は生物科学的なものであるから、現代の物質科学文明が進むほど、その不自然な環境から離れて、自然的な生物環境にあこがれるようになるのが当然であるから、人生にとって園芸がますます好ましいものになってくる。

園芸の興味は、生の神秘さ、自然の神秘さを味わうことであって、そこに物質科学では味わい難い幽玄さと深長さとが潜んでいるのである。

生のものを作る技芸が園芸であって、新鮮な生のものを生産するのが園芸業というのであろうが、従来は植物方面に限った考え方であって、動物方面にも生のものを作る技芸があるわけで、家禽から生卵、生肉、家畜から生乳、生肉を作ることや、そのため牧草を作ることまで園芸といっても良いように思う。実際上でも欧米では植物園芸だけでなく動物園芸が併営されているし、今後はわが国でもそうなる傾向があるので、園芸も混同方式が近代的な姿ではなかろうか。

園芸で生のうるおいを感ずるわけだが、動物が加わると生命活動だけでなく、精神活動が味わわれることになるので、一層興味がふえる。小鳥や犬猫などを飼うのも同じ興味であろうが、庭園に家禽や山羊やその他のものが加わると、一段と興味深いものになる。

植物愛と動物愛とは共に生物愛ではあるが、精神活動の有無に差がある。精神科学になると生物科学よりも割り切れない要因があって、科学的にはあまりはっきりしないが、これほど反応のよくわかるものはないので、その反応から共通する生物の情愛を感知することができるところに、人間の本質にふれるような感興が起こってくる。

物質文明から脱出して園芸に親しむということは、生を愛し生を楽しむことであって、大自然によって創造された生物に接触して、己の生との共通する生機の巧妙幽玄さを感得しながら、その生命の活動振りに共鳴するものを見出し、人間生命の本質をのぞくのである。

いかに科学が進んでも創造できそうでな

## 牧草と園芸　九月号　目次


◇表紙写真　いじわるさんはこっち
—希望に燃える若き青年—（デーリィマン社提供）
◇園芸と人生……田垣　住雄…三
◇ルーサンをもっと利用しよう……中野　富雄…六
◇早期あと地の飼料作と畜産について(一)…水島　隆…九
◇美しい芝生の作り方……伊藤奎太郎…一三
◇畑作除草剤のいろいろ……武田　俊司…一四
◇会社だより　—松戸工場より—　……一七
◇読者のページ……一八

い生活力や繁殖力を持ち、天然自然によって創造された生物の巧妙さから、自然の偉大さを感じ、神秘を覚えるのであって、創造の神こそ自然であり天地であるという信念が生まれ、自然と人生との深淵さに科学以上の深い幽玄さを覚え、そこに生物の本質を感知する。

**物質科学**は分析によって原始体を極める方向に向って偉大な躍進をしているが、生物科学では分析によって物質体の組成がわかっても、生活動はその組成物質の有機的な綜合と調和とが本質であって、さらに生物相互間には微妙な連鎖が成立し、その連鎖活動で巧妙な生活圏をつくっているから、分析よりも生態の方に興味が湧いてくる。

物質文明は物理化学の進歩でいろいろの精密な機械や精巧な器物をつくり出したので、機械や器物に興味を抱く人達が、それを分解したり組立てたりして楽しんでいるが、一通りわかってしまうと、いつの間にか興味を減退してしまうが、これはどんなに巧妙に出来ていても、結局わかってしまうし、また変化がないので、探索している間は興味が湧いても、探索の必要がなくなると、もはや興味がなくなってしまうのである。それゆえ、特別に愛存するためには、いわれを附けたり、魂を想定したり、骨董価値を附けたりして、情愛を通ずるようにして、精神的な興味を続けるのが常例である。

これに反して園芸は多少人為的な操作が加わっているとしても、その根底は大自然を背景にして永い地球年代を経て自然に適応進化してきたものであるから、きわめて幽玄な神秘的なものであって、とても人智では組立て得ない巧妙な有機的な構成と機転とを持ち、自然界のうつりかわりにつれて、それぞれ特異のいろいろな生態を表現し、短いシーズンの間にさまざまな生体活動を展開し、汲めども汲めども尽きない深淵な興味の泉のように、いろいろとやってみるほど深味がわかり、妙味を感ずるが、いつまでたってもわかなぬような不思議さ幽玄さによって興味が続き、深味に向ってだんだん高級なものに進んでゆく。そして、いつの間にか自然の大きな力を感じ、自然に添うような生方則を感得し、生物としての順当な気持ちが涵養され、自然愛から生物を愛し、人を愛し、社会を愛するような豊かな人間愛が生まれてくる。

**毎年繰リ**返される宇宙の正確な軌範によって、巧妙な生物の自然界が変転する広大な仕組については、とても人智の及ぶところでないから、この自然の力を神の力として信頼し、その変転を支配するものを神とし、神聖なものと見て、きわめて尊く清らかなものとして信頼感を深めてくるのである。

科学の進歩は神技と思ったことを徐々に解明しつつ進んでいるものの、現代科学の範疇において生物科学方面では、追究を進めるほどまだ割り切れないことにぶつかるので、このわからないことを神秘的として、神の扉の中に納め、by heaven として、自然（天）の力に信をおくのである。

人間がこざかしい智慧で権力や金力でやることには、いろいろ欲張ったことが企てられるが、自然には智慧を超越し欲を超越した天（宇宙）の大法則があるだけで、これが天の道であり神の道であって、尊く清らかな道である。それ故、権力、金力を恐れず神を恐れよと教訓されているが、現代の物質科学万能時代相では、物力が猛威を振って横暴をきわめているところに、不自然な世相がこんとんとして乱脈を続けるのである。

こんな溷濁した世相から解放されて、寸時でもすがすがしい気分に浴するため、数坪の園芸でも親しむことができれば、そこに人間らしいうるおいを感じ、疑惑のない世界にひたることができる。

哲学は自然、人生に対する知識の現実及び理想に関して根本的原理を追究するものであるが、イデオロギーの末節的論究に力を入れすぎて、昔の仙人や予言者ほどの貢献もまだ現われていない。

宗教は人生に超越する崇高偉大な客体を畏敬する感情を起因とし、これを人格化して崇拝信仰し、慰藉（なぐさめ）、安心を得て、人生の欠陥を補おうとするものであるが、礼拝の儀式、行事、教義、組織が分派するにつれて、宗団の勢力拡張の方に偏向して、本末転倒の姿を生じ、正教と邪教との見さかえさえ至難な様相を呈している。

**政治経済**は未完成な科学と跛行的な物質科学に眩惑せられ、徒らに物質力に偏って物権を重視し、物欲、物力の横暴に手をやき、不自然文化に走って、人権尊重を唱えながら、生存をおびやかすような危険なスピードアップや巨大な爆発力に向って、莫大な投資を続けているばかりでなく、精神科学のレベルがまだ世界を二分するような愚かなイデオロギーであやつられている。法律学、経済学というものが、まだ割り切れるような要因にまで進んでいないのに、現実や理想を未完成な知識で割り切っているところに、大きな悩みと不安とを抱いている。

地球の影のうつる月世界にゆけそうな科学的進歩を見て、宇宙征服の可能性まで予想するものがいるが、月は地球の子供であって、宇宙から見れば地球の一部であろう。何万光年という人智の及ばぬ星雲界が、果てしなく拡がっている宇宙の無限さを考えたなら、身のほどを反省してみる必要がある。

宗教では霊魂昇天を説いているが、物質不滅、エネルギー不滅が科学で証明された今日では、霊魂不滅説も信じられるのであるが、霊子がまだ見つかっていないのだから、信仰以外に頼りにならない。たとえ昇天が真理であるとしても、それはもはや生を失った物であるから、生物の姿で無限界にゆくのではない。

**宇宙界の**大勢力（自然力）によって地球を生じ、地球上の大自然によって生を受け、地球の変遷に添って生命力を進化してきた生物群は、すべて同じ自然力の下にそれぞれの相互作用の連なりを保ちながら、現世

に生を継承しているのであるから、お互いに生物仲間である。因縁の遠近にはきわめて大差があるのであるが、生命活動という点では同類なのである。

生物の地球発達史では、葉緑素の発生がなんといっても基本的なものであって、その光合成で主として太陽光熱のエネルギーを保留し、これが動機になって有機物を発生し、この有機物の集成につれて、微細生物からだんだん増大し、増大とともに機構が進歩し、さらに有機物の集積活動が増進するにつれて、これを摂取して有機活動を行なう生物が発生し、集積と循環とが起って生物界が進んだのであろう。この発展には太陽が中心になって地球の物質が参加しているが、そのエネルギーは太陽を主とする宇宙から注入せられているのであって、地球物質はその担い手（担体）として活動を続けているのが生物界の現象である。

そこで、この担い手を物質科学的に分析してみると、炭酸ガス、水などを構成する炭素、酸素、水素が最大の担い手であるから、地球の空気と水とが最大の役割をしている。活動はこの三つの元素によって起ったが、いろいろな機構や機能の発達は、さらに窒素、燐、硫黄などの元素加入によって進歩し、これらの非金属素の活動に金属系のアルカリ（加里、曹達）土類アルカリ（石灰、苦土）その他の微量ミネラルが加入するにつれて、生体の機構、機能が進歩し、現代の生物体に発達したのであろうが、この発達は永い年代を経て生物相互の関連によって、地球生物圏を作りあげたのである。

人間も今では卓越した立場にあるが、同様の過程から生まれ出たものであるから、この地球生物圏を無視して独走することはできない。万物の霊長と自称するように、霊魂（精神）の長であるが、物質的には大差がなく生命活動では動物と同じ立場にある。だから繁殖、栄養などの機構、機能では動物的であるが、霊長的な精神方面には優れた能力が賦与せられている。

この賦与された智能が進むにつれて、自然には発生しないような人智的なエネルギーの発生手段が進んで、生物及び無生物の科学が人間中心の文化経済を進めてきたのであるが、近世代に至ってとくに物質科学がめざましい躍進振りを示し、電磁波を応用するようなことや、原素まで分解して原子力を応用するようなことが、近代文化の尖鋭として進んできたので、宇宙科学としては躍進の方向であっても、地球生物圏の科学としては超自然の影響が現われて、ストレス現象とか、白痴化現象とか、原子力現象とかいわれる変調が見られ、スピードアップの事故のような急変ではないが、いつの間にか生命力をおびやかされるような生物環境の不自然感作が起ってきた。

人智というものはこんなことを科学文化として躍進するに至ったが、この不自然科学への猛進振りは自然即神のしわざではないところに、自然法則に従って進んできた地球生物圏にとっては、やはり自然即神 by heaven よりも人智の方を信頼するわけにはゆかない。むしろこの科学万能主義による人智の浅はかな自滅方向を自然即神の道に向って添わしめなければならない。このような失態をしでかすのが人間の智能たるゆえんであって、ちょうど薬として発見したものを毒薬として応用するような、科学の被害現象である。

やっと戦争を避けようとする精神が進んできたのに、平和だといっても人命に危険な科学文明が止め度もなく発展するようになったのも、地球生物圏の調整に対する神の思召しかも知れないが、また神の警告かも知れない。

いかに智慧が進んでも生物は自然から離れ、神にそむくことはできない。現世に生を受けた限り現世の自然に添うことが神の道であり、また最も信頼できる道である。

**園芸は大**小を問わずこの自然を背景にし神秘を信じて、生けるものの生命活動を見守るところに、自己の生命に通ずるなれあいがあって、その親愛感から自然の道を悟り、自然の世界になじんで生物愛から人間愛への本質的な愛情をとり戻すところに、科学文化を越えた情愛が醸し出され、生を自ら芽生えさせ自ら育てあげ得るというよう境地に立って、生命活動を支配するような感覚を覚え、その感興から自然への道、神の道を知らず識らずの間に会得するところに、きわめて自然に人間性を尊く清らかに導く効果がある。

私達の小学校時代には学校園というものがあって、狭いながら何坪かの園芸をやらせられたものであるが、こんな教養手段を誰が工夫したものか知らないが、今から考えてみると深い意義を持っていたものと思う。現在でも一部でそれを見るが、都会であるほどそんなことが大切な教養のように思われる。土地のゆとりがなく運動場さえ屋内にしているくらいだから、地面に園庭を作ることなどできない場合が多いだろうが、屋内また屋上に設備することもできるだろうから、学校園の普及を望んでいる。

家庭には庭園が附属するのが常則であるが、ビルや公営住宅でも園芸を無視するような設計では、人間の情想に影響してくるであろう。とかくすさみがちな工場などには、つとめて庭園を設け、いこいの場、うるおいの場、解放の場をつくることが、人間性をやわらげるため必要であろう。

自然に恵まれない都会では、公園、植物園、動物園などの自然な場や街路樹の美しい並木など、不自然な環境にうるおいを与える効果が大きい。東京などかつて都心生活から田園生活へのあこがれが高かったが、どうしたことかまたビル建設が文化の表徴とでも思ってか、ビル乱立の世相が目につく。

動物園も不自然な姿から、だんだん自然な姿の設計に変わりつつあるが、刑務所などはすでに自然に親しめるような設計に進んで、人間性への環境感作に留意している。

園芸はいこいのうちに人間性をつくるような、人生ときわめて深い連なりのあるものだから、産業というような経済面だけでなく、精神面に大きな貢献をしているところに、芸術的な意義が深長なのである。

**（札幌市在住　草地農業研究家）**